
sora rhythm

西澄まゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

s o r a r h y t h m

【ノード】

N4899Y

【作者名】

西澄まゆ

【あらすじ】

バイバイ、名西。バイバイ、弱かつた頃の俺。バイバイ、真由美。
。俺は歩きだすんだ。過去を抱えることが、どんなに辛い
ことだとしても。
。

12月のある日、西松添は春に入学した名倉丘西をやめ、全寮制の清怜学館に入学する。犯した過ちはそのままに、ようよ歩きの自分がまた。

赤色灯の闇（前書き）

何度もかの復活になるのかな?
またよろしくです

2011.12.10

『母さん、俺強くなるから。今決めたから』

『心配しないで、もう真由美はいない。わかってるから。』

『今まで育ててくれて、本当にありがとう。たくさん迷惑かけて、

ごめん』

『じゃあ、行くからさ。バイバイ』

俺は送信ボタンを押した。ちょっと震えていたかもしれないけど、あえて気づかないふりをしよう。

大きく息を吸い込んで顔を上げた。吐き出した息が赤色灯の光にきらめく。

早朝の駅へ続く道は暗くて冷たかった。ミトンになつた手袋をすり抜けて、冷気が入り込んでくる。冬の4時半だから無理もない。俺は立ち止つてマフラーをまき直し、ひとつ息をついてまた歩き始めた。

まだ先は長いんだ、ちゃんと自分で歩いていくつて決めたんだから。

親不孝者に告ぐ。(前書き)

第一話ー長いです。

親不孝者に告ぐ。

「そんな辛氣臭い顔して歩いてると、また女の子に嫌われるぜ」「闇を優しく和ます赤色灯の下に、闇を覚ますような美形が一つ。」

「礼！」

早川礼はいつもの学ランに紺のマフラーを巻いて、コンビニの裏の赤色灯にもたれかかっていた。吐く息が白く残つて、礼の整つた顔を曇らせる。

「女みたいで嫌だから、そうやつて呼ぶなって言つただろ。」「何をいまさう」

礼は小さい頃から一緒にいる、いわば幼なじみというやつだ。もはや腐れ縁に近いものもあるけども。そして物心ついたときから、つていうか漢字を覚え始めたくらいから、こいつは女みたいな自分の名前を嫌つてる。「ライ」を「レイ」つて呼び間違えると烈火のごとく怒るから、気を付けた方がいいよ。

ま、女みたいな綺麗な顔してるんだけどね。

「つていうか、よく来る時間がわかつたね。」

「別に。^{そう}添の部屋の電気がつくの、俺の部屋から丸見えだからね。そうだった。こいつの家は隣のマンションだから、カーテンを開けてると丸見えだ。俺、今日は最後に空気吸つとこいつと思つて、窓まで開けてたわ。

「ちゃんとお母さんとお話してきた?」

礼は俺の顔を覗き込むようにして聞いた。黙つてうつむいて、静かに首を振る。

「そつかー・・・」

礼は口から白い息を大量に吐き出しながら言つた。冷えたアスファルトの感触が、靴を通して伝わつてきそうな、冬の夜明け。礼は突然ふつと笑つと、

「親不孝者め」

ふざけた調子で呟いた。

「何を、」

反論しかけた俺の鼻先に、奴は何かをぶら下げた。つい手でバシッと掴み取る。

それはフェルトの布で作られた、可愛らしくピンクのお守りだった。

「これ・・・・・?

「江梨子に渡すように頼まれたんだよ。」

礼は面倒くさそうに言つた。俺の田の奥に、同じ部活だった江梨子の顔が浮かぶ。

ふだんのクールで美人な顔と、俺を責めたてたときのあの恐ろしい表情。その二つの表情は、指紋を認証するように重なつて一つになつた。

あの江梨子が・・・?

「お前のことを許すって言つてたよ。」

礼は俺の手のひらに置き去りにされそなお守りをひっくりかえした。そこには赤い手袋をした女の子がフェルトで形作られていた。少し茶色がかつた巻き髪に、いつも笑つてる瞳。赤みの差したほつた。

ピンクのシュシュ

ずっと見慣れてきて、でも急に遠ざかつた真由美のその顔がそこには縫い付けられていた。

「でも、真由美のことを忘れたら許さないとも言つてた。」

礼はいたずらぽく笑つて、お守りをおれのパートのポケットに滑り込ませる。

代わりに右肩に下げていた鞄から、俺は黒いノートを取り出した。

「忘れないようにこれ持つてくんだ」

礼は黙つて日記帳を開くと、黙々とページを開いた。赤ペンで書かれたページで、手が止まる。

そのまま駅に向かつて、俺たちの足は進みだした。もちろん、田は文字を追つてゐる。

清算しようとしている俺の過去を「」のハートは全部知ってるんだから。

・・・思い出の墓場だ。

高校レビューの冷や汗

2011.4.7

「ねえねえ、西松くんはどこの中学校から来たの？」

漫画や小説でよく見る光景がそこには広がっていた。校庭にひらひらと舞い落ちる桜。さあアンパンに乗つける、とでもいうように綺麗な形をした花びらが、風に乗つて俺の学ランをかすめていく。暖かい日差しが教室の白いカーテンをわずかに越して俺たちに降り注ぎ、まだ少し冷たい風がそのカーテンを揺らしていた。さつきから満面の笑みで俺に話しかけてくる女子たちも、また俺の描いていた高校生活の一部。

「萩山だよ。知らないと思うけど……」

余裕なふりして返しながら、ずっと手が震えてる。怯えちゃうよ、全く。

内心、冷や汗冷や汗。高校レビューってこれだからなんだかなあ。

あんまり楽しくなかつた中学校生活を何とか受け流し、泥沼を歩くような受験勉強をやりきつて今日ここに足を踏み入れた。とりあえず陸上部がつらかったのと女子の子にもてなかつたことしか思い出のない中学校をでていれば、別にやるいとしなくなつたつて自動的に高校レビューすることになるだろう。

県立名倉丘西高校。校則が緩く、伝統校で知られるこの学校は高校レビューにはもつてこいだ。
西松添、ちょっと張り切つてたりする。

俺は窓から空を盗み見た。青く突き抜けて、瞳にまぶしい。
俺はここでやつていく。

春なんて、きっとみんな無責任な誓いをするものや。なあ、西もん
うだつただろ？

物理とはトキメキである。

「西松くんてやー、ノート綺麗だよねー」
眠たすぎる物理の授業。今すぐよだれをたらしながら寝たいくらい
気だるい。

不意に横から話しかけられて、俺はびっくりと肩を震わせた。いけな
いいけない、油断してすっかり力を抜いてた。

「え・・・いや、そんなことないと思うけど。な?」

俺は慌てて後ろの席に座っている礼に話を振った。「西松」が前、
「早川」が後ろっていうのは、小学校のときからお決まりの配置だ
から、もづ慣れっこ。

「うん・・・添は字がふえあ・・・」

完璧に寝ていたんだあるうちは、フニャフニャと寝言のような答え
を返して、また夢の中へ。ゴスッ、という無粋な音をたてながら、
机におでこがぶつかった。本当、昔から生粋の自由人だよな、こい
つ。

「・・・寝ちゃった・・・の?」

「うん・・・そうみたい」

話しかけてきた女子は、一瞬きゅっと眉根を寄せた。呆れてるよ。
でもその次の瞬間には、彼女の表情は笑顔に変わっていた。

「二人とも面白いねー!」

授業中だといつのに、ケラケラと声をあげて笑う。先生がこちらを
キッとにらんだ。

彼女は笑うのをやめ、先生を宥めるよつに肩を竦めた。

それから、もう一度俺のほうを振り向く。

「あたしの名前、覚えて」

今度はばれぬように小声で。

「清水真由美」

彼女の髪が茶色がかっていることに、俺は今気がついた。毛先はく

るぐると巻かれて、真っ白な小さい顔を包んでいる。

「よろしくね、西松添くん」

俺はきっとこの時から、真由美の虜になってしまったんだろう。

物理とはトキメキである。（後書き）

活報は後で書きます！

誰にも言えない（前書き）

超久々！！

活報は後で書きますよ

誰にも言えない

授業が終わった。

同じ六時間授業なのに、中学のときより疲れたと感じるのはなぜだろ。つ。チャイムが鳴つても授業が終わったことに気付かなかつたかのように、しばらくみんな固まつていた。

その沈黙を破るかのように後ろで何かがもぞもぞと動いて、俺の肩を指先でちょんちょんとつづいた。

「礼・・・」

「おはよ。添、お前はストレスが溜まりやすいほうだから、あんまり真面目やつてるといつか切れるぜ」

礼は一人で異様に元気だつた。どうせ一日中寝てたんだろう。まだ入学して三日ほどしか経つてないといつのに、本当しちゃうもないやつ。肝が据わつているともいえるけどさ。

「で、どうするんだよ」

「何がだよ」

「部活だよ。今日から部活動見学だろ？」

そうだった。

ここ名倉丘西では、一年での部活動選択が、今後の高校生活に大きく関わつてくるらしい。ああ、確かに昼休みに色んな部活の先輩たちがPRに来ていたつ。

まあ、昼休みにチャラチャラした先輩が入つてくるのは、恐怖意外の何物でもないつていうのが、新入生の本心なんだけど。

腰パンに茶髪、タンクトップにピアスの男の先輩なんて初めて見たし、平気でパンツを見せて歩いてる、キャバ嬢みたいな女子高生なんて、今まで知らなかつた。

世界つて広い。本当、高校入つてそう思えるよつになつた。

まだ一週間もたつてないんだけどわ。

「・・・そういう礼は何をやるんだよ。また陸上？お前、足ホント速かったしな」

「馬鹿言え。もう一度とやるか、あんな拷問。」

礼は吐き捨てるようにそう言つて、ふいつと顔をそむけた。そんな姿はまんまガキだ。

礼とは昔からずつと一緒にいたけど、幼心に『礼は周りより大人』だと感じることが多かった。もちろん、幼いとは言えない年に俺が成長してもそれは変わらない。

小学校のときも中学校のときも、いつの時代でもこいつは周りと一線を画していた。

無理に周りと無理に馴染もうとするることは一切なく、時に痛々しく見えるほどに礼は周囲に反発した。同化しないことによって、大勢の集団の流れと擦れて、傷ついて磨かれて、気づけばいつもあいつは一人で大人になっていた。

でもたまにふと見せる表情はびっくりするくらいあどけなく子供で、突然それを出すから、見せられた方はたまらない。

・・・礼からもう目が離せなくなる。

俺はそれが激しくなり始めた中学くらいから、俺はずつとその感覚に悩まされている。

綺麗な横顔に、気づかれないように咳く。

答えろよ、俺より『大人』なんだから、お前は答えを知ってるんだろ。

この気持ちは、何なんだよ？

誰にも言えない（後書き）

うん、なんかちょっとあたしも思つてなかつた方向に進んでるけど、
B〇とかそつち系にはならないから！
安心して！

まあそつち系あたし嫌いじゃないけどー（爆）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4899y/>

sora rhythm

2012年1月8日19時54分発行